つて、雪の災害から雪華研究の歴史やその方法、或は人工雪華のことなど雪の興味ある諸現象を容易に理解することが出來る。殊に空から降つて來る雪の一片一片が如何に複雜な、而も規則正しい結晶を作つて居るかを知る時は、誰しも自然に對する新しい驚異と愛を感ずるであらう。尤も本書が最初の「雪と人生」の章を除いては、大部分が雪の結晶の話に盡きて居るため、多分物足らなく思はれる人々もないではなからうが、序文にも「雪と人生」の問題は「結晶の話とちがつて私の本當の專門でない」と記されて居る如く、雪の物理學を研究される著者に向つて專門外の領域まで多くを望むことは無理であらう。併し結局雪に關する諸問題の中一般が多大の關心を持つものは雪と人間生活の交渉であることは云ふ迄もないことであつて、またこの問題こそ我國の氣象學者や地理學者が率先して研究すべき任務を有するものであらう。何れにしても本書の如き優れた著書の出版されたのを機緣にして今後雪に關する種々の問題が眞摯な研究者によつて續々發表されるならば誠に望ましいことゝ云はねばならない。（岩波新書、一六一頁岩波書店發行、定價五〇錢）（織田武雄）

彙報

昭和十四年度史學科卒業論文題目

國史專攻

鎌倉の新時代意識　伊東　誠之
明治開化期と市民文化の成立　石田　一良
近世都市の一考察
—都市發達と町人階級—　石田　義信
日本教化の展開
—教化意識と時代精神—　入矢　春雄
我國文化史上に於ける蘭學の意義　內海　十郎
我國中世的世界　江頭　三郎
江戸前期に於ける町人素描　金子　一司
幕末佐賀藩の研究
—藩體制崩壞過程の一考察—　川崎新三郎
復古神道の發展に就ての考察　草間　俊一
律令時代の土地問題を中心として　小林　尊志
中世に於ける神佛習合思想の變遷と元寇の影響　五來　重
所謂水戸學の一考察　櫻井　一朗
中世武家社會に於ける實踐的文化　田中　章
蘇我公家と耶馬臺國　田中　勝藏

近松門左衞門と其時代　高木　隆
戰國時代諸侯の統御策と時代性　谷口　益男
上代文化と歸化人　中野　三令
平安朝に於ける精神傾向と時代文化　羽田　秀典
明治初期に於ける封建的精神の推移
—士族を中心として見たる—　長谷川雄一
德川封建制度と町人　弘津　德
奈良朝時代の民間に於ける佛教信仰の一研究　福井　明

東洋史專攻

漢代の奴隷に關する一考察　小畑　龍雄
光海君の外交方針　久保　耕司
宋代に於ける貨幣の史的一考察
—北宋時代に於ける銅鐵錢に就て—　久保　次直
明の朝廷に於ける西藏喇嘛教徒の問題　佐藤　長
王安石の新法の意義　仙頭　藏
北魏佛教の一考察　古澤　芳吉
後漢黨錮攷　武田　豐

西洋史專攻

Henry II の改革　草場　典夫
英國中世隷農制度の消滅に就て　笹川　新一
中世遠距離商業の一考察
一七八六年の英佛通商條約について
—佛國を中心として—　辻本　倉雄
エリザベッ朝時代の淸教徒主義とその政治的考察　吉川　潔

地理學專攻

北支那農業に於ける氣候的災害に就て　淺井　辰郎
武藏國見沼代用水の研究　柴田　孝夫
十州鹽田稼業の地理學的考察　特に讃岐鹽業に就て
—特に讃岐鹽業に就て—　內藤　玄匡

考古學專攻

考古學上より見たる漢代の生活
—主として衣食住について—　岡崎　卯一
石器時代に於ける北海道文化　松田　一政

昭和十四年度史學科講義題目

正科目

			一週時間
國史			
普通	國史概說(第一部)	西田　教授	一
	國史概說(第二部)	中村助教授	二
特殊	京都の文化・文化史實習	西田　教授	二
	中世の社會統制の問題	藤　助教授	二
	明治維新史	藤井　講師(三〇)	
	近世拓殖史	牧野　講師	二
	日本近世史料研究	柴田　講師	二
	飛鳥時代の文化	東伏見講師	二
	近世神道史	淸原　講師(二〇)	

演習　古典の思想史的研究　西田　教授　二

東　洋　史

普通　東洋史概説(第一部)　那波　教授　二
東洋史概説(第二部)　宮崎助教授　二
特殊　春秋戰國時代の文化史的考察　那波　教授　二
近世東西交渉史　宮崎助教授　二
歐洲に於ける東洋學の發達(前學年の繼續)　石濱　講師　二
明朝の對滿蒙經濟政策　田村　講師　二
元代社會史上の特殊問題　安部　講師　二
清朝八旗制度考　鷲淵　講師(四〇)
支那目錄學　特に史籍を中心として　神田　講師(二五)
演習　東洋史の諸問題　那波　教授　二

西　洋　史

普通　西洋史概説(第一部)　原　教授　二
西洋史概説(第二部)　時野谷教授　二
特殊　ビスマルクと「クルツーア・カンプ」(前學年の續き)　時野谷教授　二
希臘宗教思想史　原　教授　一
中世の國家　鈴木　講師　二
古代國家の構造とその思想　井上　講師　二
演習　第十八・九世紀西洋史上の重要問題　時野谷教授　二
西洋史の諸問題　原　教授　二

史學研究法　原　教授　一

普通　史學研究法

地　理　學

普通　地理學通論(第一部)　小牧　教授　二
地理學通論(第二部)　末　定　二
特殊　二十世紀の探檢(前學年の續き)　小牧　教授　二
地圖學特論(前學年の續き)　小野　講師(二〇)
政治地理　室賀　講師　二
聚落の歷史地理學的研究　米倉　講師(二〇)
演習　地理學の諸問題　小牧　教授　二
實習　地理學實習　小牧　教授　二

考　古　學

普通　考古學概論　梅原助教授　二
特殊　日鮮考古學　梅原助教授　二
支那考古學(六朝以後)　水野　講師　二
京都の文化・文化史實習　西田　教授　二
春秋戰國時代の文化史的考察　那波　教授　二
古代國家の構造とその思想　井上　講師　二
演習　近時考古學の諸問題　梅原助教授　二
實習　考古學實習　梅原助教授　二

日本精神史

普通　日本精神史概説　西田　教授　二
中世佛教の成立とその根本思想　高山助教授　二

副科目

國史
- 日本古文書學概論　中村助教授　二
- 國史々料講讀及實習　藤助教授　二
- 日本神祇史　宮地講師(二〇)
- 神道と民間信仰　折口講師　二
- 東洋史籍講讀　那波教授　一

西洋史講讀
- Ranke, Ueber die Epochen der neueren Geschichte　時野谷教授　一

地理學
- 獨逸地理書講讀　小野講師(二〇)
- 佛蘭西地理書講讀　室賀講師　一

考古學
- Casson, Progress of Archaeology　梅原助教授　一
- 人類學概說　金關講師(二〇)

教育學教授法
- 教育學序說(哲學科講義)　木村助教授　二

美術史
- 大和繪の展開(鎌倉時代以後)(哲學科講義)　源講師　二

英語
- T. S. Elliot, Essays "The Somme Still Flows"　中西助教授　二　Ashton講師　二

獨語
- 高桑、提要獨逸小文典(第一學期)　石川講師　二
- Rilke, Geschichten vom lieben Gott (第二學期)　石川講師　二

(第一回)

佛語
- Rilke, Auguste Rodin (第二回)　石川講師　二
- 內藤濯・新基本佛蘭西文典教科書　內藤濯・ふらんす語教科書　伊吹講師　二

(第一回)

- André Gide, Lafcadio (第二回)　伊吹講師　二

希臘語
- Tanaka, Graecae Grammaticae Rudimenta (第一回)　田中教授　二
- Xenophon, Memorabilia / Platon, Kriton　田中教授　二

(第二回)

- Euripiedes, Alkestis / Anthologia Graeca　田中教授　一

(第三回)

羅甸語
- Tanaka, Nova Gramatica Latina　田中教授　二
- 田中・久保・神田編ラテン文選集　田中教授　二
- Vergilius, Aeneis, II　田中教授　一

支那語
- 支那語發音篇・支那語法篇 / 支那語讀本卷一・支那語繙譯篇　倉石助教授　二

(第一回)

- 支那語讀本卷二 / 支那語繙譯篇卷二　傳講師　二

(第二回)

- 兒女英雄傳 / 支那語繙譯篇卷三　傳講師　二

(第三回)

露語
- 八杉貞利・初等露西亞語文法 / ソヴイエツトロシア初等語學讀本　十時講師　二
- 露字新聞 / チエーホフ短篇集　十時講師　一

(第一回)

(第二回)

伊語
- 伊語初步　黑田講師　二

大報恩寺所藏大藏經奥書の調査

國史研究室に於いては本年一月二十三日より京都市上京區五辻七本松に在る大報恩寺（新義眞言宗智山派）に藏する大藏經の奥書の調査を開始し、計十八日間を以て是を完了した。大報恩寺は承久三年、求法上人義空が之を草創して、本尊釋迦牟尼佛及び十大弟子像を安置するところであつて、古來涅槃會、遺教會を修することが昌んに行はれ、徒然草にも「千本の釋迦念佛」として世に識られて居た。殊に足利幕府の厚い歸仰を享け、尊氏は命を本寺に降して涅槃講を行はしめ、遂に常典と爲した等の事もあつた。かうした宿緣の下に大藏經は當寺に備へられる事となつたのであるが、常に祕寶として深藏されて居たため、其の由來に關しても文獻の記載が殆んど無く、唯寺傳に足利義滿が明德二年洛西内野の地に討滅した山名氏清の菩提を弔はんが爲めに此の大願を發し、其の遺命によつて應永十九年此の一切經の書寫が行はれたことを謂ふに過ぎなかつたのである。

扨て今此の各卷殆んど全部に書遺された奥書によつて略々闡明し得た其の沿革は次の如きものであつて、紙幅の都合により、一々の根據を擧げることを避けて綜合的に記せば、先づ此の書寫は應永十九年壬辰三月より八月迄の極めて短い期間に行はれた事が知られる。即ち同年二月二十五日より三七日の間法華滅罪の法を修し、結願たる三月十七日に百餘輩の淨侶を讌して、一齊に立筆し八月九日には早くも「略畢」とあつて、夫以後の日附を有するものは僅かに一卷發見されたに過ぎない。此の大事業は覺藏及び增範なる二人の願主に依つて企圖されたものと思はれ、何の奥書にも必ず兩者何れかの名が書留められ、而も「本願聖人」「大勸進聖人」「三國無雙之大願主」等の尊稱を冠せられて居る。此の兩者は俱に讃州の住人で、權少僧都の位に在り、同一部の經典の各卷に於いて往々相互に交錯してその名が現はる事があり、而も相並んで記されてゐる事の一度も無い點等よりして、兩者は實は同一人たるかを思はしむるものがあるが、夫にはまた確かな資料を缺いてゐて、容易に斷定することは出來ない。出現の回數に於いては覺藏の方が遙かに多く、彼は自ら筆を下して書寫をもして居り、文龜元年の奥書に「北野覺藏坊之有賀書之」とあるのは、覺藏の德を記念して、後年一宇の坊舍の建立された事を想像せしめるのである。

此の願主とは別個に、各々の函に就いて、檀那或は施主が存した。また筆者の中にも特に主筆が存し、最後に之を校合するため校者として、河内觀心寺の學侶阿闍梨瀧尊以下諸所の學匠がその役を擔當する等、かゝる書寫に際しての人員の機構を窺ふに足るものがある。さて其他の一般の「右筆」は、東は上州館林、常陸下妻等より、西は日向、薩摩に到る弘い地域から參集した僧尼道俗を以つて混成されてゐるが、彼等の年齡が讃州道隆寺賢信の十九歲なるを始めとして、鹿ね二十代を主とし、四十歲以上の者は殆んど見出されない事は注目すべき事實である。そして此の若い「佛子」達は各々にさゝやかな願を立て、或は此の書寫結緣の力を以て滅罪生善、利益人天を冀求し、或は父母師長の菩提を祈る等

多種多樣であつて、その信仰も決して密教のみに限られたものではない。中には法華の宗徒も交つて居て、法華の題目と四個格言を掲げてゐるものもあつて興味深く觀られるのである。更に關心を惹くことは、北野天神に對する崇敬の文字が隨所に散見して、當時の天滿宮信仰を窺はしめることである。元來此の大藏經は、大報恩寺の塔頭にして北野社内に在つた大經堂に於いて書寫せられ、「北野宮寺寶前常住御經」として永く神前に奉納されたものであつて、その爲に、「奉法樂北野天滿天神」と云ふ如き天滿宮尊信の法偈は尠からず見出される。後、文龜元年、隆圓の奥書にも天滿天神の冥慈を乞ひ、「渡海成就給」へと希ふものがあつて渡唐天神の信仰を示してゐる。

以上の如くにして書寫せられた大藏經は、先づ延應永二十年二十一年及び三十一年等に、僧空等、勢秀等により轉讀されたことが知られる。當時毎年二月八日より十五日まで遺教經會または訓讀會と稱する會式が本寺に催されて、貴賤緇素の參詣が絶えなかつたのであるが、應仁文明の大亂によつて、堂舍傾廢し、風雨の漏濕も久しかつたため何時しか其のことも無く、經典の散逸、脱漏も漸く甚しきものがあつた。先比國史研究室に採訪した田中忠三郎氏所藏公武年代記の紙背に

文明十一、十、五、北野經、自應仁二至文明十、亂中怠轉、當年己亥再興、依不事調、經衆三百人(下略)

と見えるのも此の頃の事情を物語るものであらう。此處に於いて明應九年より文龜元年及二年に掛け、隆圓、有賀、良源等の僧徒相議して大いに補寫轉讀の事を行つた。當時約百卷の不足があり隆圓は之を栂尾高山寺の橘坊に於いて書續けたことを記してゐる。

其後天文五年京洛の沙門廣藏は虫秡ひを行ひ、同十四年より十六年に亙り北野内會所に於いて之を披覽し、次いで慶長十年には大報恩寺住僧舜算及び舜興の兩名が、同寺の僧衆十人を率ゐて虫秡ひと轉讀を行つた。また元和四年、一切經の修補があり、松井喜左衞門尉なる者は其の隣家に在つて一卷の經文を書寫したことを記してゐる。

近世に入つて以後も、元祿十四年には石寶、能嘉、能音、明和元年に寛隆等が書寫を續けたが、同二年には武州の心海、常州の龍海、同國の宗海等が、建仁寺所藏の鮮本及び現流明本を檢し、更に欠本を堺某寺所藏の宋本に尋ねて闕脱を補充したことがあり文化十三年秋には、大報恩寺止住の權僧正慈順が八十二歳の高齡を以つて明本との對校を遂げたこと等が知られる。

初め此の一切經を書寫する時、その據るところの原典は何版の藏經であつたらうか。刊記としては、高麗版及び北宋福州開元寺版の刊記を載せたものが數卷觀られるが、固よりその數が鮮いこと、高麗版は建仁寺の藏本を檢した事實が明らかであること、開元寺本も現に知恩院に殆んど完全なるものが存し、其處からの補寫が容易に考へられること等よりして、輕々しく此の刊記に動かされることは出來ない。之に反し、本藏經の中の法顯傳一卷を南宋磧砂延聖院版の影印複製本と對校すると、細部の差違は在るに

しても、大體の體裁は一致してゐる。更に南宋版と同じく黄表紙の折本であること等よりして寧ろ南宋版との親近さを考へるべきではなからうか。

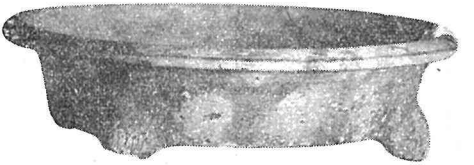
ともあれ永享二年六月二十五日、大藏頂禪咒經卷第二が何人かにより一校された時の奥書に於いて既に「本ヲカル所ハ因幡堂、松尾、栂尾、八坂堂、建仁寺」とある如く、夙くより内容の紛亂と竄入、改刪を免れなかつた此の一切經は、總點數に於いても、大藏經の完本が通常六千帖以上に上るのに比し、五千帖餘に減少して居り、而もその中の約一割が腐蠹や錯簡のために、研究對象としての資格をさへ喪失せんとしてゐる狀態であつて、その眞實な姿は更に精密な再査を俟つて始めて詮明さるべきものであらう。

終りに臨んで、此の調査に際し終始獻身的な努力を惜しまれなかつた大學院學生諸氏の勞苦に對して衷心より謝意を捧げたいと思ふ。（稻葉慶信記）

大津京址の調査續報

滋賀縣に於ける大津京阯調査事業は前號所報の如くその後も引續き繼續されて居り、舊臘十二月には崇福寺彌勒堂阯の再發掘が行はれて、前回の調査によつて明らかにされてゐる六間三面の彌勒堂礎石の外その南に接續して四間二面の別の建造物があつたことが發見されたのみならず、更にそれよりも東方に數十間を隔てた急傾斜面より隆平永寶以下數種の皇朝錢並におびたゞしい陶器（壺、皿、椀その他の雜器）破片類が出土し、記錄に見える堂舍位置の比定考證の上に新なる問題を投げかけることになつた。

ついで本年正月には再び南滋賀の遺蹟に返つて昨年夏の調査につぐ西方部並に南方部の發掘が行はれ、それ〴〵新なる小發見があつたが、就中こゝに特筆すべきは、二月に入つて發掘が東南部に及ぶと共に、多數の古瓦に混じて唐三彩の盤並に破片が發掘されたことであらう。盤は挿圖に見る如く殆ど完形にして口徑約八寸、高さ脚共に約三寸極めて粗笨なる下地の上に器の内外に亙つて薄き三彩の釉藥を加へたものであり、破片は圖上にて複原の結果皿、蓋、合子、並に子持壺等の一部であることが明らかにされた。これらのものゝ性質の十分なる究明はなほ今後の研究に俟たなければならないが、その外觀は現に正倉院御物の中に傳へられるものと殆ど同一であり、それ以外内地に於いては嘗て出土の例を聞かないところよりして、その發見は獨りこの遺蹟の性質推定の上に重大なる暗示を與へるものとなるばかりでなく、廣く唐瓷器の歴史研究の上に新なる資料を提供するものと考へられる。（柴田實）



例　會　二月十三、十四兩日午後一時より陳列館第一教室に於いて本年度卒業生の卒業論文概要發表を行ふ。西田教授、藤助教授、柴田講師等の外學生多數參集し熱心に聽取した。十四日には會後引きつゞき寺町三島亭に於いて卒業生の爲に豫餞の宴を開き多數先輩もその席に加はり宴を盛んにした。尙當日の談話は諸種の事情にて當日發表することの出來なかつた人の分をも合せて次號に紹介することゝする。

民俗學會

例會　十二月二十二日午後六時より樂友會館にて開催。講師赤松先生初め西田、藤、柴田各先生以下學生等來會者二十名、學外出席者もあり盛會であつた。講師には寫眞、民俗用具の實物等多數を示されつゝ概要左記の講演を行はる。

內蒙に於ける宗教民俗に就いて　赤松　智城

內蒙に於ける宗教民俗は十程に分類される。第一は薩滿教であるが、之は先に讀史會で述べたから省略する。第二は土俗祠でそれを祭る所を小廟といふ(又家廟)。その代表的なものは胡仙、黃仙蟒仙卽ち狐鼬蛇である。胡仙は夫婦で太爺太々と云ふ。土地祠は土地廟に祭らる。總じて多くの神が習合してゐるのが滿蒙宗教の特徵である。第三は道教系の大祠で、その代表的なものは娘々廟、その祭は娘々祭で四月前後各地に行はれる。關帝廟は武祠で公的に崇拜されてゐる。孔子廟もあり、以上三廟が習合合祀されてゐる。第四は佛教で滿洲では多く道教と習合してゐる。第五はラマ教で南方に多い。第六は鄂博、卽ち石積の信仰で聖樹が植つてゐる。その信仰行事は蒙古固有で定期に公祭として行はれる。第七は新興宗教で紅卍教で相當勢力がある。內部組織は二つに分れてゐる。道院といふ修行團體がある。崇拜對象は世界大宗教を先天老祖を中心に集めたものである。又扶乩がある、神憑となつた巫が、託宣を文字に書く。在理教は宗教道德的團體であり、在家教は祕密結社で任俠を重んずる。第八は儒教である。その行事は宗教的である。孔子廟の釋奠は盛で特に滿洲國成立以來官憲により大いに行はれる。第九はキリスト教、第十は回々教である。シヤマニズムはダブール族に勢力がある、ラマ教を信じシヤマニズムを脫せんとしても病を醫す事が出來ず、シヤマニズムを信ずるのである。顯博の祭はラマ僧が行ふ。內蒙宗教民俗を通じて三大要素がある。第一北方文化共通要素、第二チベットのラマ教文化要素、第三外來漢民族文化要素が蒙古宗教文化圈にある。蒙古王爺廟軍官學校學生七十八名の宗教統計調査(數字略す)によれば全體として佛道兩教並立し、ブリヤート族は殆んど佛教で道教なく北方民族には南方の影響が少い。蒙古固有神ベンテオンとヂンギスカン崇拜が第三位を占める。(文責在記者)

東洋史談話會

本學東洋史昭和四年卒業の大藤特派員横田高明氏を迎へ、昭和十三年十二月二十日午後一時半より、樂友會館第一號室に於て

南支及び佛領印度支那の事情に就いて

といふ題で、座談的に氏の見聞したところをきいた。

氏は滿洲事變には、從軍して錦州入城をした人、中途敵彈にたほれた茅野記者とゝもに映畫に、浪曲にその勇名をうたはれたこともあつたし、今事變が始ると、南支に、佛印に特派せられ、現地から寄せる報道はその健筆と相俟つて讀者の心をひきつけてゐたところから、面識あるとなきとにかゝはらず、人々は大きな期待をもつて集つた。はたせるかな氏の舌端よりほとばしる體驗談は、聽衆を魅了し、深い昂奮を與へねばおかなかつた。歸阪をいそぐ氏を無理にひきとめて晩餐をともにし、その席上を利してさかんにいろんなことを質問し散會したのは七時過であつた。東洋史以外からも參加する人があり、聽衆三十幾名、例會では未曾有の盛會であつた。

卒業生豫餞會

昭和十四年一月二十一日午後六時、學友會館六號室で開催。出席者十四名、會食後、今年事業論文を提出した諸君を中心として論文執筆の動機、作製の苦心等についてきく。

漢代の奴隷に關する一考察

小畑　龍雄

饑餓と貧窮と流亡とは、國家を持たぬ支那農民の宿命である。火野葦平の「花と兵隊」に出てくる支那青年はかう言つた。しかもこのことは深い歴史的認識をまつて始めて理解されると思ふ。僕の關心は特に支那農村社會に向けられたが、この論文は謂はば僕の現代的關心のはるかな前提に外ならない。

支那農村社會の研究は決して少くない。奴隷研究も梁啓超をはじめ屢々取上げられた。ただ徒に考證を重ね史料を抽出羅列し、或は獨斷的な觀念形態を述べたてたものが多いのは遺憾である。僕の小論文はこの樣な不滿を出發點とする。内容は序のほか五項目に分けた。

一、奴隷の發生—その形式と社會的事情—。
二、奴隷の業務—生產と消費—。
三、奴隷の社會的地位
四、奴隷對策
五、奴隷の經濟史的意義—生產部門に於ける相對的地位—。

この論文を書いて思ふことは、從來わかりきつたことのやうに考へてゐたことにもなほ問題が少くないこと、華々しい唯物史家の論述に多くの誤謬があること等々である。

後漢黨錮攷

武田　豐

普通に宦官・士大夫の衝突として認められてゐる後漢末の黨錮事件なるものは、當時一般に普及して上は政治經濟より、下は一般社會の生活にまで力强く作用してゐた儒教精神を内的因子とし、實際上の政治社會の有樣を外的因子する經緯に依つて織成されたものと考へたいのである。

具體的に言へば後漢に於いては儒教至上主義が徧く承認され、上知識階級卽支配階級が、自らをその構成分子とする漢室に依る政治的統制、及所謂禮教思想に依る人間生活の規定、といふ事を是認し、下一般も亦天降的に其れを信じ、其れ等が輿論として黨錮諸士の行動を支持する精神的地盤を形成してゐたのであつた。

斯る時に當つて其理想的統制を紊るものとして豪宗の發展が現はれ、彼等はあらゆる力を動員して經濟的利益を獨占し、官界に乘出しては支配階級たるべき正義の士大夫を排斥したので、劉氏を中心とする官僚組織が弛緩し出した。併し斯る狀態は士大夫にとつては主義上から默視すべからざる所である。從つて豪族對士大夫、觀念的に言へば宗族力對政治力の衝突として士大夫階級の憤起にその必然性を認めるものである。そこへ偶々外戚・宦官の跋扈專横といふ事實が彼等を蹶起せしめる直接の契機として現はれたので、彼等は所謂淸議たるイヂオロギーに依つて敢然として立ち、一身一家を犧牲にして主義の爲に殉じたのであつた。

其黨禍の實情、失敗の原因、後世への影響等は割愛に附する事とする。

明の朝廷に於ける西藏喇嘛教徒の問題　佐藤　長氏

元代に於て喇嘛教が朝廷内に榮え、種々の害毒を流した事は普く知られる所であり、又淸代に對蒙政策上よりも西藏喇嘛教徒が優遇された事は史上に明かである。しかるにその中間時代たる明代に至つては全くと云つてよい位白紙の狀態で、殊に萬曆以前にその感を深くする。本論文の目的はその缺白の時代の喇嘛教を明朝の對西藏政策との聯關の上に見んとするもので、明實錄と西藏蒙古の喇嘛教史料を對校し事實を定めて次の諸點を明かにしたものである。卽ち(一)元代のサスキア派の獨占的優越性は元朝の末期から崩壞したが明代には之が繼承され、分割統治の方針によつて各派が平等に待遇された事、(二)明初の烏斯藏七大法王はそれ〴〵紅教派のいづれかに屬し黃教派は僅かに一人のみであり、依然として紅教派が全盛をきはめて居た事、(三)その紅教各派は明廷内に入りこみ、元朝のそれに優るとも劣らぬ害毒を流した事、(四)明朝諸帝の喇嘛教への狂信は對西藏の經濟上の問題たる茶馬法に深酷な影響を與へた事、(五)武宗代の所謂活佛は第二世達賴喇嘛なる事、(六)萬曆時代における俺答汗との關係より第三世達賴喇嘛は支那に於て終にそれまで微々たりし黃教派の勢力を獨占的地位にまで高めた事、(七)東方に於ける黃教派の喇嘛教は此の時を以て確固不快の權威を獲得するに至つた事、等である。

東洋史談話會、支那學會合同

卒業論文發表會

三月十七日午後七時より樂友會館に於て開催

東洋史研究會

新歸朝者にものを聽く會

昭和十四年一月二十一日午後一時半より樂友會館二號室で開催

語る人は文部省在外研究員として昭和十一年二月出發。滯佛二年餘にして昨年八月歸朝された宮崎助教授と、佛國政府招聘留學生として昭和十一年九月渡佛、昨年十月に歸國した羽田明氏である。パリに於ける兩氏の勉强振り、古本屋あさりの話、彼の地大學の講義ぶり、支那學の研究狀況等々話の種はつきない。談話を終へてのち、宮崎氏がカイロで買つてこられたレコードをきく。

支那繪畫史部會

二月十日夜、樂友會館一號室に於て開催。

東方文化研究所月例公開學術講演會

二月四日午後一時半より

歳星紀年法に就いて　能田　忠亮氏

魏晉南北朝の官制に就いて　内藤　乾吉氏

三月四日午後一時半より

殷墟白色土器再考　梅原　末治氏

清朝末期に於ける日支交渉の一節　三國谷　宏氏

西洋史讀書會

例會　昭和十三年度第四回例會は三月十六日午後二時より文學部陳列館内に於て開催せられ左記の讀書紹介後原教授を中心として内容檢討に入つた。

一、ダンテ神曲地獄編六―十一　二回生　外山　齋

例會終了後「梅の井」にて本年度卒業生豫餞會を開催午後九時解散す。

地理學談話會

例會　一月二十八日午後二時より、於實習室

一、中央アジア及極東に於る定期航空路　川上喜代四

一、マニオーラ　野間　三郎

例會　二月十日午後三時より、於實習室

一、北支那に於る氣候的災害に就て　淺井　辰郎

一、十州鹽田豫業の地理學的考察　内藤　玄匡

右は本年度卒業論文の報告にして、他に柴田孝夫君も報告を行ふべきであつたが發病缺席。

豫餞會　二月十日午後六時より樂友會館にて卒業生豫餞會を催し簡單な料理の會食と記念撮影といふ質素なものであつたが、小牧教授の挨拶、卒業生淺井君の謝辭、二回生川上君の送別辭など和な空氣の内にいづれも極めて自然に行はれ氣持よい豫餞會であつた。

謝恩會　口頭試問終了後の三月十七日卒業生謝恩會を催し小牧教授、藤田前講師、室賀講師、を北白川新白糸に招待、記念品贈呈とか教室に圖書なり設備なりと寄贈するとか、他の方法も考ふる所であつたが、適當な費用で適當な物品は撰擇が困難といふことになつて實現されなんだ。

考古學談話會

考古學談話會の第三學期例會は文學部陳列館第二教室に於いて二月四日午後一時半から開催された。出席者は梅原助教授、岡島柴田兩講師以下二十六名、昏時に至つて閉會した。演題及び其の概要を左に掲げる。

法琳寺の瓦窯　木村捷三郎氏

京都市東山區北小栗栖の法琳寺は同寺の別當舊記に據れば孝德

天皇の御願と傳へ、また承和七年紀には入唐僧の常曉が本寺を以つて大元帥法の修法院と爲すことを請うて聽された由が見える。現在、法琳寺は南面せる山麓の階段狀斜面に遺跡を存し、出土瓦中には白鳳型式のものが檢出されてゐる。一昨夏、同寺より東約一丁距てた竹林中に瓦窯一基が發見され、此れが京都府史蹟調査會の手で調査を行ふことゝなり、梅原助教授、木村氏等により、本年一月中旬に實施、稀に見る好成績をあげた。木村氏の講演は其の結果の報告であり、併はせて法琳寺との關係に及ばれたものである。さて瓦窯は栗栖野の其れと構造を同じうする半登りの平窯で、平瓦及び塼を以つて築成され、周圍一帶の粘土は高熱のため紅赭色に燒けてゐる。焚口の天井は發見後の土崩れの爲に崩壞してゐたが、火床より瓦置部へ通ずる具合は良好な保存狀態を示してゐた。瓦置部は矩形の、高さ四尺の四壁より成り、下底には數條の平瓦積みの畧があり、更に瓦置部の背面には三本の煙出しが造置されてゐるが、此等は何等かの理由で實用に供されなかつたものゝ如く、煙出しは瓦置部の天井に穿たれたと推定される。而して瓦窯内からは瓦當の出土はないが、栗栖野の例から提しても平安朝初期のものと考定される。從つて本瓦窯は平安朝初期に於いて、法琳寺の修繕用の古瓦を燒いた瓦窯と看做されようと結ばれた。

九州の石人石馬

梅原助教授

北九州の古墳表飾として存在する石人石馬の類は德川時代から世人の注意にのぼり、筑後の其れに關しては早く矢野一政の「筑後將士軍談」に纒まつた記述があり、明治末年には柴田常惠氏の其等を集成せる圖錄も出た。石人石馬は九州の裝飾古墳と聯關して其の性質を究明する必要があるので、夙に本學でも濱田博士の提唱により大正六、七年頃からこの調査に着手したが、其の後、森本六爾氏が同じ仕方で一通り石人石馬を纒められたので、一時其れを中止する樣な姿となつた。ところが、昭和十年に北九州の裝飾古墳を調査した際、此等を更めて觀察し、從來の調査が個々の破片から原形を組立てる點で注意を缺いた所があり、かつ其等の本質も充分究められてゐないことに氣付いた。それで新に調査の方針を立て、日本古文化研究所の援助の下に昨年末に計畫を實施した。其の結果、福島公園の石人石馬の間から立派な、實大に近い馬が組立てられたり、或いは高さ八、九尺の裸人像が出來上つたりした。また岩戸山に在る石造物のうちから所謂矢筒や楯の外に、石の太刀や大きい壺が出てき、其等が確かめられた結果、這種遺物の全體的性質がより明瞭となり、其の點では石人石馬は埴輪と同じもので、單に石で模したに過ぎぬことやまた石人石馬は石彫としても優れたものであることが闡明された。本講演は以上の詳細を寫眞と實測圖を以つて說明されたものであるが、其の結果は古文化研究所の報告として發表される筈である。

古代埃及象形文字を通じて

岡島　講師

文字が如何にして造られたか、古代埃及の場合にも、漢字の其れと同じく六書が認められる。更に埃及人が、その文字について表はした思想を觀る意味に於いて『火』に關する文字を實例につい

て說かれ、この場合、限定符として『火鉢』を以つて表はして居るが、特に『鎖火具』に就いて說明し、古代埃及人の信仰や日常生活の反映してゐることを指摘された。（角田）

會報

◇會員動靜

◇入會

東京市下谷區上野櫻木町三九　尾形龜吉氏
兵庫縣武庫郡寶塚上川面宮ノ前一六　高木隆氏
京都市中京區四條烏丸西入ル　谷口益男氏
京都市左京區南禪寺福地町正因庵　櫻井景雄氏
名古屋市昭和區廣路町石坂町十一　田中善一氏
（右五氏　稻葉慶信氏紹介）
東京市豐島區雜司ヶ谷一ノ三一〇　山崎宏氏
（肥後和男氏紹介）
岡山縣勝山中學校　阪本董夫氏
（柴田實氏紹介）
福岡市吉塚新町五三〇　辛島重義氏
（長壽吉氏紹介）
京都市左京區吉田神楽岡町一　平松方十河泰雄氏
京都市左京區北白川別當町九九　河野方岡崎卯一氏

◇轉居

京都市上京區大宮通廬山寺上ル　前川貞次郎氏

◇退會

內田勤氏

◇寄贈交換圖書目錄（四月現在）

朝鮮史編輯會編　朝鮮史總目錄　朝鮮總督府
植木博士還曆記念國史學論集　植木博士還曆記念祝賀會
東方學報　東京九　東方文化學院
史學科研究年報　五　臺大文政學部
金鶏の光　鳥見山靈時顯彰會
史學雜誌　五〇ノ一・二・三　史學會
歷史地理　七三ノ一・二・三・四　日本歷史地理學會
社會經濟史學　八ノ九・一〇・一一・一二　社會經濟史學會
史苑　一二七ノ二・三　立敎大史學會
史學研究　一〇ノ二　廣島史學研究會
人類學雜誌　五三ノ一・一二、五四ノ一・二・三　東京人類學會
考古學雜誌　二八ノ一二、二九ノ一・二・三　考古學會
文化　五ノ一二、六ノ一・二・三　東北大文科會
國學院雜誌　四五ノ一・二・三　國學院大學
史迹と美術　一〇ノ一・二・三　史迹美術同攷會

第二十四卷　第二號　二四〇

社會學徒	一三ノ一・二・三	社會學徒社
和紙研究	一	和紙研究會
臺大文學	三ノ五・六	臺大文學會
國民精神文化史	五ノ二・三	國民精神文化研究所
觀	一八	早大文學會
宗學研究	一七	宗學研究會
民族學研究	四ノ四・五ノ一	日本民族學會
以可留我	八	鶴故鄉舍
東洋史研究	四ノ二	東洋史研究會
中國文學月報	四四・四五・四六	中國文學研究會
善隣協會調査月報	七九・八〇・八一・八二	善隣協會
歷史學研究	八ノ一二、九ノ一・二	歷史學研究會
軍事史研究	四ノ一・二	軍事史學會
哲學研究	二三ノ一二、二四ノ一・二・三	京都哲學會
紀州文化研究	二ノ一〇・一一、三ノ二・三	紀州文化研究所
イスラム	六	イスラム文化協會
長崎談叢	二三	長崎史談會
無閑之	二三・二五・二六	むかしの會
歷史と國文學	二〇ノ一	太洋社
基督教史研究	二・三	基督教史研究會
國史學	三七	國史學會
史淵	二〇	九大史學會
商業と經濟	一九ノ二	長崎高商研究館

Harvard Journal of Asiatic Studies　三ノ三・四
Harvard-Yenching Institute.